

## 若きレッシングの宗教思想

安 酸 敏 眞

### 第一節 若き自由著作家の軌跡

一七二九年一月二十二日、ザクセンの小邑カーメンツの牧師館に生を受けたゴットホルト・エフライム・レッシングは、生涯キリスト教と対峙する運命に定められていた。ドイツ精神史上、ヘルダーリン、ニーチエ、テイルタイ、ヘッセなど、牧師館に生まれた偉大な文学者や哲学者は少なくないが（ついでながらヘルダーの父は教会の塔守であった）、レッシングはまさにその最初の偉大な思想家であった。彼の父ヨーハン・ゴットフリート・レッシング (Johann Gottfried Lessing, 1693-1770) は、ヴィッテンベルク大学で神学と哲学を修めた学識ある正統派の牧師であったし、彼の母ユスティーナ・ザーロメ (Justina Salome Lessing, geb. Feller, 1703-1777) も代々続く牧師の家系出身だったので、ルター派キリスト教の伝統は、生まれながらにしてレッシングの血肉の一部となっていた。

弟カール・ゴットヘルフ (Karl Gotthelf Lessing, 1740-1812) によれば、「レッシングは、ほんの片言をしゃべることができるようになるとすぐ、お祈りをするようにしつけられ、そして父親自身から最初の口頭による宗教の授業を受けた。四、五才の頃には彼はすでに、自分が何を、なぜ、どのように信ずるべきかを知っていた。」<sup>1)</sup>彼は幼少の頃から

天才氣煥発で、異常なまでに書物を愛好する子どもであった。わずか五才のとき、鳥籠をもたせて描こうとした肖像画家に向かつて、「高く高く積み上げた本と一緒に僕を描いてくれなきや嫌。そうでなきや描かないで」と言つたといふ。

一七四一年、マイセンにあるザクセン候立聖アフラ校に入学するが、そこでもレッスンは「頭脳の鋭敏さと抜群の記憶力によつて異彩を放つて」<sup>(3)</sup>おり、校長が「二倍の秣が要る馬」(ein Pferd, das doppeltes Futter haben muß)に譬えたほどの理解力と熱心さで、あらゆる教科を短期間に修得してしまつた。彼は古典文献学と数学に特に強い関心を示したが、その一方で文学的創作への衝動も抑え難く、処女作『若い学者』*Der junge Gelehrte* の草稿をすでにこの時代に書いている。

一七四六年六月、成績抜群により通常よりも一年早く候立学校を卒業すると、その年の九月、レッスンは家庭のしきりに従つて、ライプチヒ大学の神学部に進学した。当時この大学にはエルネステイ (Johann August Ernesti, 1707-1781) がいたが、彼にとつて神学部の授業は退屈なものであつた。若き神学徒の心をとらえたのは、むしろ文献学者クリスト (Johann Friedrich Christ, 1700-1756) と数理哲学者ケストナー (Abraham Gotthelf Kästner, 1719-1800) であつた。はじめのうちこそ「自分の全幸福は書物のなかにあると確信して」<sup>(4)</sup> 勉学に打ち込んだ彼ではあつたが、当初の勉学意欲も長くは続かなかつた。田舎出の多感な青年にとつて、「全世界を小規模ながら見ることでできる」<sup>(5)</sup> ライプチヒは誘惑に満ちた大都会であり、自分の世間知らずさや野暮ったさを痛感した彼は、「書物は博学にするが、決してひとかどの人間にはしない」<sup>(6)</sup> と悟り、それまでの読書三昧な生活を捨てて市井にくだす。<sup>(7)</sup> そして自分の貧粗な体つきや社交下手を改善するためには、いかなる犠牲も厭わぬ決意をした彼は、新たにダンスとフェ

ンシングと乗馬を習いはじめ、専ら実人生の勉強に精力を傾ける。やがて彼は、当地で一人前のジャーナリストとして活躍していた七歳年長の従兄のミューリウス (Christob Mylius, 1722-1754) を介して、演劇の世界へと足を踏み入れて行き、ついには両親が定めた神学の道から逸脱してしまふ。

しかし、神学の勉強を途中で放棄したばかりか、「ドイツのモリエール」(ein deutscher Moliere)<sup>(8)</sup> たらんとして喜劇作家の道を目指し始めたわが子の姿は、敬虔な牧師館の両親にとっては、聖書の「放蕩息子」の轍を踏むものにならず、息子の魂の救いを危惧した牧師の父は、深い愛情と厳しい叱責を含んだ手紙を彼に書き送った。これに対してまずは控え目に、「けれども神は、わたしが自分の宗教と自分の両親に対して抱いている愛を、十分明確に示す機会をわたしに与えて下さるものと思っています<sup>(9)</sup>」と答えたレッシングであったが、キリスト教信仰からの逸脱を重ねてなじる父親に対して、二十歳の「自由著作家」は再度筆を執って、啓蒙思想家としての面目躍如たる自己弁明を試みる。

「キリスト教教理の原則を覚えこみ、しばしばそれを理解もせず唱え、教会に通い、あらゆるしきたりを、ただそれが慣行になつてゐるからとの理由でともにする人間がよりよきキリスト教徒であるのか、あるいは、ひとたび賢明に疑い、探求の道を辿つて初めて確信に達した人間、ないしは達しようとして少なくとも努力している人間がよりよきキリスト教徒であるのか、それは時が来れば分かることです。キリスト教は両親からそっくり鵜呑みにして受け取られるべきものではありません。なるほど大抵の人間は、財産を相続するのと同じようにキリスト教をも両親から相続しますが、彼らはまた行状によつてどのように立派なキリスト教徒であるかを証明するのです。わたしとしては、キリスト教の最も重要な戒めの一つ、「汝の敵を愛せよ」がよりよく遵守されぬ限り、キリスト教徒を自称する者たち

が果たしてそうであるかを疑います。』<sup>16)</sup>

両親が期待した道からは外れようとも、牧師館の息子としての心意気だけは失つていないと主張するこの手紙には、真理探求者としてのレッシングの真面目が見事に示されている。ここにはまた、愛がキリスト教の本質であり、その実践こそが真のキリスト教徒の徴表であるという、彼の一貫した信念が驚くべき明瞭さで語られている。<sup>17)</sup> いずれにせよ、生家の伝統(キリスト教)を「賢明に疑う」(Kluglich zweifeln)ことが若きレッシングの宗教的探求の出发点をなしていることはここに明白であり、愛情深くも厳格な両親と二重写しとなったキリスト教の伝統と真剣に對峙するなかで、やがて彼は独自の宗教哲学を形成するにいたるのである。

## 第二節 若きレッシングの宗教的懷疑

さて、ここでのわれわれの課題は、「若きレッシングの宗教思想」を究明することであるが、「若きレッシング」といった場合には、いわゆる「修業時代」Bildungsjahre (1748-1760) の彼に的を絞るのが適切であろう。前節で見たように、ライプチヒ遊学時代(1746-1748)のレッシングは、先ずは神学生として、次に医学生として大学に籍を置きながらも、劇団との深いつき合いが災いして借金地獄に陥り、そのために勉学を断念せざるを得なくなる。やむなくベルリン(1748-1751)へ遁走した後には、ヴィッテンベルク(1751-1752)、ヘルリン(1752-1755)、ライプチヒ(1755-1758)、ヘルリン(1758-1760)と数年おきに居住地を変更しながら、『ベルリン特許新聞』の記者を皮切りに、随筆家、文芸評論家、劇作家、さらに雑誌編集者として口を糊しながら、生家の信仰とは無縁な自由著作家としての

生活を続けている。しかしだからといって、キリスト教に対する関心が全面的に失せてしまっわけではない。第一次ベルリン時代に書かれた断片詩『宗教』*Die Religion*の序文には、「宗教は、すでに何年も前から、わたしの真面目な詩興を掻き立ててきたものであった」<sup>24)</sup>と述べられているし、後ほど考察するように、ほぼ同じ時期に成立した「ヘルンフト派についての所見」*Gedanken über die Herrnhuter*や「理性のキリスト教」*Das Christentum der Vernunft*といった初期の断片は、若きレッシングの宗教的関心とその思想的特徴をよく示している。

さらに、一七五一年末から約一年間、ベルリンでの文筆活動を一時中断したレッシングは、マギステル取得のためヴィッテンベルク大学に赴き、そこで宗教改革時代についての歴史研究を行なっている。その貴重な研究成果が「カルダーヌス弁護」、「ホラティウス弁護」、「イネプトウス・レリギオース弁護」、「コッホレーウス弁護」の四編からなる『弁護』*Rechtungen* (1754)であるが、これらはいずれも、世間の偏見や悪意により不当な扱いを受けてきた人物や書物を発掘して、より客観的・公平な視点から評価し直し、それらの名誉回復 (*Brennung*) を図ろうとしたものである。レッシングが世間の風評に逆らって敢えて異端ないし背教の思想 (家) を取り上げた事実は、彼が火つけ役となったヴォルフフェンビュッテル時代 (1770-1781) の『断片論争』 (*Fragmentenstreit*) を側面から解明するよすがとなるであろう。

ところで、さきにわれわれは、キリスト教を「賢明に疑う」 (*küßlich zweifeln*) ことが若きレッシングの宗教的探求の出発点をなしていると述べたが、それを一番よく示しているのが、アレクサンダー詩句による断片『宗教』 (1749/50) である。この詩の「前置き」において、二十歳の若き詩人レッシングは、この詩が成立した背景と詩の主題を簡潔に述べているが、それによれば『宗教』と題するこの詩は、自らに萌した宗教的懐疑 (それはまた時代の懐疑でも

あつた)を、「鬱ぎの虫が起こつた孤独な日に秘かに交わした独白」として纏め上げたものである。彼によれば、「自己認識」はつねに「宗教にいたる最も近道」であつたし、また「最も確かな道」<sup>(13)</sup>でもあつた。しかし、誕生の初めに立ち返つてみると、われわれは一体何を発見するだろう。家畜と交わらない、否、家畜以上に悲惨な人間の姿ではないのか。精神も感情も欠いた長い歳月が続いた後、われわれが人間であることを初めて認識するのは、自己のうち悪徳を見いだすことによつてである。人間においては、悪徳の力は美徳の力よりも強い。「誰がこの惨めな運命から免れていようか? 最高の賢者ですら免れていない。賢者の場合には、悪徳はより美しい仮面をつけて支配しているだけのことであり、また対象とする事柄の性質ゆえに、極悪非道の賤民の魂におけるほど有害ではないだけのことであるが、しかし賢者にあつても悪徳は彼らと同じほど強い力をもっている。」かかる悪徳を目の当たりにして、「何という光景だろう! 人間の心の全範囲にわたつて悪徳しか見いださないとはいへない! しかもそれが神から来るといふのか? 全能にして賢明な神から? 責め苦のような懷疑!」、と詩人は嘆息する。しかしこの懷疑のただなかでひとつの宗教的直観が詩人の脳裏をかすめる。「けれども、おそらくわれわれの精神は、それだけですます神的なものなのである。われわれはおそらく真理のために造られたのだ。なぜなら、われわれは美徳のために造られてはいないからである。」だがここでさらなる懷疑が詩人を襲う。「真理のため? 真理とは何と多様であろうか? 各人は真理を所有していると思つてゐるが、しかし各人は異なつた仕方であつて真理を所有している。否、誤謬のみがわれわれの持ち分であり、われわれの学問は妄想である。」このように懷疑の嵐に身を晒しながら、若き詩人はいまだ確固たる答えを見いだせないままに、次のように自問自答する。「人間とは何か? 人間はどこから来たのか? 神から来たにしては悪すぎるし、偶然から来たにしては良すぎる」(Der Mensch? Wo ist er her? Zu schlecht für einen Gott; zu gut fürs

Ungelahr)<sup>(7)</sup>。

二十歳の詩人の手になるこの詩が「レッシングの世界観の生成過程を認識するための計り知れないほど大きな価値を持ったドキュメント」<sup>(8)</sup>であるかどうかは別にして、「レッシングはここではあらゆる種類の啓蒙主義神学から遠く隔たっている」<sup>(9)</sup>ということは明白である。彼はネオロギーにもライブニッツヴォルフ的な樂觀主義にもきわめて批判的で、その口調はルター派正統主義と聞き違えるほどである。例えば、「忌々しき机上の知識よ！ 汝ら賢明なる愚か者の奇妙な考えよ！」（第35行）、「わたしもまた知恵にたぶらかされ、高慢に威張りくさり、哲学的狂乱すらも真理と見なした」（第61-62行）というふうには、啓蒙主義的悟性の立場を痛罵している。他方では、「驕り、妬み、わがままは子どもの行為においても／教師の鋭い目をしばしば勇ましくも裏切った。／しなやかな精神が美德を知るようになる前に、／ああ！ なにゆえかかる害毒は体内で荒れ狂ったのか、／快くもわたしを駄目にする凶暴さをもって。／……／ゆらゆら揺れる善悪の概念ははまだ魂のうちに眠っていた。／そして精神が目覚め、わたしが選択しようとしたとき／ああ！ わたしは自分の選択において間違うべくすでに定められていたのだ。」（第128-130行）、「汝らはわたしの意志の自由な力をいたずらに高める！／わたしは欲しに欲する、——けれどもわたしは有徳的ではない。」（第167-168行）、「おお心よ、モール人のように黒く、豹のように斑点だらけ！」（第33行）といったような表現で、人間の罪並びに意志の無力さを赤裸々に告白している。

このように、一見したところ、人間の「悲惨さ」を「宗教への道案内」<sup>(10)</sup>としている詩人の立場は、優れてルター主義的であるかのように見える。しかしこの時点のレッシングが、本当にルター派正統主義の立場に立っていたかどうかは疑問である。というのは、宗教に対する詩人の関心は、「救いをもたらすその福音にあるというよりは、むしろ

その認識論的内容にある」<sup>18</sup>からである。けれどもH・ライゼガングのように、「レッシングはすでに正統主義の立場を放棄している。……なぜなら、彼が探し求めている宗教には、ルター派正統主義において一切のものがそのまわりに集まる、中核概念たる信仰が欠如しているからである」<sup>19</sup>という結論を下すには、われわれはもう少し慎重でなければならぬだろう。J・シュナイダーは、「この断片は現状のまま判断されなければならない。他のもので補足したり、何かを持ち込んで解釈してはならない」と主張しているが、この詩だけから判断するかぎり、むしろわれわれは「第一歌には正統主義の教理と矛盾するところが含まれていない」という控え目な結論に満足すべきであろう。若きレッシングが六部構成の大掛かりな詩を構想しながら、第一歌だけで筆を折ってしまった理由は定かではないが、いづれにせよこの詩が断片にとどまっている以上、かかる断片的性格はそのまま尊重されなければならない。<sup>20</sup>

### 第二節 若きレッシングの神学批評

われわれが次に考察しなければならないのは、「ヘルンフト派についての所見」(1750)という断片である。ここでは若きレッシングは、非凡な神学的洞察をもって同時代のキリスト教を批判の俎上に載せている。彼は哲学とキリスト教の歴史を大局的な視点から略述しながら、教条主義的な正統主義と思弁的な啓蒙主義神学の双方に対して、痛烈な批判を投げかける。

この断片におけるレッシングの最重要な根本命題は、「人間は行為のために創造されたのであって、屁理屈をこねるために創造されたのではない。しかし屁理屈をこねるために創造されたのではないからこそ、まさにそれゆえに、



人間は行為よりも屁理屈をこねることに没頭する<sup>23)</sup>』というものである。彼はこの命題を立証するために、哲学史とキリスト教史を概観する。

レッシングによれば、「真理の宣教師」たるソクラテスは、人間の有限性をわきまえぬ不遜なソフィスト的な知のあり方を鋭く批判して、われわれ自身の内面へと眼を向けること、つまりわれわれの内奥の「きわめがたい深み」、「心の奥底」を探究すべきことを説いた。しかし彼の弟子たちのなかで師が示した実践知の道を歩んだ者はほとんどいなかった。「プラトンは夢想 (Träumen) しはじめ、アリストテレスは推論 (schließen) しはじめた<sup>24)</sup>」。古代、中世の哲学はこの両者のいずれか一方の支配下に置かれてきた。やがてデカルトが現れてすべての人に神殿への扉を開いた。真理は彼の掌中で新しい形態を獲得するかのように思われた。しかし二人の人 (ニュートンとライブニッツ) によって哲学は数学に従属せしめられ、再びより非実践的なものとなった。今日では、「哲学者たちは頭を一杯にするが、心は空っぽのままである。彼らは精神を天上のいやはてまで導くが、それなのに心は情欲のために家畜にまでなり下がっている<sup>25)</sup>」。

キリスト教の歴史もこれと同様である。アダムの宗教は「単純で、平易で、生き生きとして」(einfach, leicht und lebendig) いた。しかしこの状態は長くは続かなかつた。アダムの子孫たちは自分勝手に人類始祖の素朴な宗教にさまざまな細工を施した。アブラハムとその子孫たちは比較的真理に忠実であり、それゆえ神から寵愛されたが、次第に彼らの大多数の者も「神についての正しい概念」を保持することができなくなり、遂には神を朝夕捧げられる祭物なしには生存できない存在に変えてしまった。かかる蒙昧から世界を救い、迷信に対して真理が勝利するのを手助けするために、「神によって啓発された教師」(ein von Gott erleuchteter Lehrer)<sup>26)</sup> たるキリストがやってきた。彼の目的

は「宗教をその明瞭な姿に回復すること」(die Religion in ihrer Lauterkeit wieder herzustellen)<sup>(27)</sup>に他ならなかった。

原始教会の時代には、信者たちは厳格で有徳的な生活を送り、愛を実践しながら、真理のためには死をも辞さなかった。しかし社会に定着するにつれて、教会は「その宗教にきらびやかな装飾を施し、教理を一定の秩序へともたらし、そして神的真理を人間的証明で支える」<sup>(28)</sup>ことに専念した。かくして「実践のキリスト教」(das ausübende Christentum) に取って代わって、「観照のキリスト教」(das beschauende Christentum) が支配的になった。

宗教改革は、キリスト教を本来の姿に回復しようと欲したし、またそうすべきであったが、二人の指導者(ルターとツヴィングリ)が些細な言葉上の問題をめぐって対立し、その目的を達成できなかった。宗教改革によって迷信が力を失い、真理がその輝きを増したことはたしかであるが、他方では宗教改革は「キリスト者の義務の履行」からいよいよ遠ざかるという別の誤謬へわれわれを導いた。かくして今日では、「神学と哲学のかくも見事な合成」(eine so vortreffliche Zusammensetzung von Gotteslehre und Weltweisheit) がなされ、哲学は「証明によって信仰を強要し」(den Glauben durch Beweise erzwingen)、神学は「信仰によって証明を支え」(die Beweise durch den Glauben unterstützen) ようとする。このような「倒錯したキリスト教の教え方」によって、啓蒙の時代の現代においては、真のキリスト教徒は無知蒙昧な時代にくらべて、はるかに稀少になってしまった。「われわれは認識においては天使であり、生活においては悪魔である」(Der Erkenntnis nach sind wir Engel, und dem Leben nach Teufel)<sup>(29)</sup>。

以上が「ヘルンフォート派についての所見」の概要であるが、ここにおけるレッシングは、理想的な宗教を「単純で、平易で、生き生きとした」アダムの宗教に見、聖書の宗教の歴史を自然宗教から実定宗教への頹落として捉え、さらにキリストを「神によって啓発された教師」と見なすなど、その理神論的傾向は歴然としている。にもかかわらず、

ここには単なる理神論とは異なるレッシング固有の宗教思想の特徴がすでに明瞭に見て取れる。信仰と知識の峻別、敬虔な信仰の尊重、形而上学的思弁に対する行為的実践の重視、愛の実践を中核に据えたキリスト教理解などがそうであるが、こうした思想傾向は、以下に引用する「ベルリン特許新聞」(一七五一年三月三十日)の論評に最も端的に読み取れる。

「大抵の神学者が不毛な論争に自<sup>己</sup>を見失つてしまう時代に、キリスト教の実践的要素について考える神学者がいまでも時々いることは、幸いなことである。大抵の神学者ときたら、辛辣さ、喧嘩好き、中傷、抑圧などから心を清めることによつて、またキリスト者の唯一の本質的表徴をなすあの愛を広めることによつて、一体化への基礎を据えるということは後回しにして、あるときは単純なヘルンフート派を断罪し、あるときはさらに単純な宗教の嘲笑者にいわゆる反駁をもつて報い、その結果嘲笑に新たな材料を提供したり、またあるときは一体化できない事柄について喧嘩をしたりしている。人々が合意して自らの義務を遂行するように意を用いる前に、継<sup>ぎ</sup>はぎ細工でただ一つの宗教を作ろうとすることは、虚しい思いつきである。一つ小屋に閉じ込めれば、二頭の悪犬が善良になるとでもいうか。見解の一致ではなく有徳的行為における一致こそが、世界を平穩にし幸福にするのである。」<sup>30)</sup>

#### 第四節 喜劇『ユダヤ人』

さらに、「若きレッシングの宗教思想」を論ずる上で見逃すことができないものの一つに、二十歳の彼が五作目の喜劇として書いた、一幕ものの喜劇『ユダヤ人』*Die Juden* (1749)がある。<sup>31)</sup>芝居のあらすじはきわめて簡単で、ある

男爵がユダヤ人の風体をした二人組の辻強盗に襲われるが、すんでのところを従僕を従えた一人の旅人に助けられる。男爵はもとより周囲の者たちも、犯人がユダヤ人であると信じて疑わない。しかし男爵を救った旅人によって次第に悪事が暴かれ、真犯人は男爵家の執事クルムと領地内の村長シユティツヒであったことが明らかになる。そしてゆきずりの危険に身を投じて男爵を救出した旅人こそ、実はユダヤ人であったことが判明する。男爵はそれまで自分が抱いていたユダヤ人に対する偏見を痛く恥じる、といった内容である。

レッシングはこの作品を、一七五四年、『著作集』第三部に収録するにあたって、序文で作品成立の背景を次のように述べている。

「キリスト教徒は、ある種の尊敬の念なくしては、この民族を眺めることができないはずであるが、この「ユダヤ人」という作品は、その民族が嘆息せざるを得ない屈辱的抑圧を、真摯に観察してきたことの成果であった。かつてこの民族からとても多くの英雄や預言者たちが輩出した事実を考えたとき、この民族のもとではひとりの誠実な男でさえ出会えるものであろうかと、いままつて疑念を抱く人がいるのだろうか？ 劇場に対する当時のわたしの熱の入れようときたら大変なもので、頭に浮かぶすべてのものが喜劇に変じたほどであった。そこですぐさまわたしは妙案を思いつき、まったく推測だにされないと、この民族のために美德を証明してみせるとき、舞台の上ではどのような効果が發揮されるだろうかと、試してみようと思ったのであった。」<sup>32)</sup>

それゆえ、この作品を「蹂躪された民族の見事な名誉回復のドラマ」と見ることもあながち間違ではないが、しかしレッシングの主眼は、ユダヤ人の名誉回復そのものであるよりも、むしろキリスト教社会に巣くう偏見、偽善、不寛容といった悪徳を告発することであつたと思われる。近代ドイツにおけるユダヤ人に対する偏見がいかに根強く

悪質なものであったかは、若干二十歳の劇作家が登場人物に語らせる台詞によく表れている。自分の犯罪行為をユダヤ人に転嫁しようとするクルムと、身分を隠した親切的なユダヤ人に助けられた男爵は、当時のキリスト教社会が共有していたユダヤ人に対する偏見を、ほぼ異口同音に口にする。

「旅人…あれはユダヤ人だったと、あなたのご主人は断固言い張られますが……」

クルム…ええ、もちろんですよ。わたしだつてユダヤ人だつたと思つています。あなたはあの罰当たりのならず者をまだよくご存知ないのでしよう。奴らときたら、ひとり残らず、かたりに泥棒か辻強盗でして。だからまた、神様から呪われた民族なんで。わたしが王様というわけにはゆきましますまいが、わたしが王様なら、奴らをひとりだつて、ただのひとりだつて、生かしておきやしませんや。ああ！神よ、すべての誠実なるキリスト教徒をこうした手合いから守りたまえ！……できることなら、あの忌々しいユダヤ人どもを、ひとり残らず、いちどきに、毒殺してやりたいものです……」<sup>34</sup>

「男爵……わたしを襲つたのは本物のユダヤ人だつたということが、おわかりでしょうか？ つい今しがた、わたしのところの村長が、二、三日前、国道でユダヤ人を三人見かけた、と申しております。村長が申しますには、彼らはまつとうな人たちというより、泥棒に似た様子をしていました。わたしだつて、どうしてそれを疑えましようか？ 金儲けにあんなに執着する民族というものは、儲け方が正当であるか不当であるか、悪知恵を用いてか力づくでかといつたことは、ほとんど問題ではありません——あの民族は商いにも、あるいはドイツ流に言えば、いかに

まにも適しているようです。慇懃で、こだわりなく、進取の氣に富み、口かず少なく、これらの特性は、わたしたちを不幸にしすぎるのがなければ、あの民族を尊敬させるに足るものなのですが……— おお、まったく陰險、卑劣な連中だ——何か補足なさることでも？ ひどく沈んでおられるご様子ですが。

旅人…何と言えばよろしいのでしょうか？ そのような苦情をしょっちゅう耳にしてきた、と申し上げるほかありません。

男爵…彼らの顔かたちにもなにか反感を抱かせるものがございますね？ 陰湿なもの、不誠実なもの、利己的なもの、詐欺や偽証が、彼らの目からはつきり読みとれるように思いますね……

旅人…お話を伺っておりますと、ご主人、あなたはたいそう人相学にお詳しいようで。わたしは、もしか、わたしの人相が——

男爵…まあ！怒りますよ。よくもまあ、そんな疑いをおもちになったことです。人相学に詳しくなくても、わたしはあなたのお顔ほど、誠実な、鷹揚な、親切なお顔を、ついぞ見かけたことはありません、と申さずにはおれません。旅人…正直に申しますと、わたしはすべての民族について、一般的な判断を下すことには馴染めません……いかなる国民にも善人もいれば悪人もいる、と思われてならないのです。ユダヤ人の間にだって——」<sup>35</sup>

ここには、真のキリスト教精神に根本的に背馳するキリスト教社会の反ユダヤ的偏見と、旅のユダヤ人がゆきずりのキリスト教徒に身をもって示した、あらゆる宗派精神や党派精神を超越した普遍的人間愛との対照が、鮮やかに描き出されている。晩年の「賢者ナータン」*Nathan der Weise* (1779) を彷彿させるような普遍的人間性と人類愛の理

想は、この作品の大団円において、男爵と旅人のお互いを賞賛する言葉のなかによく示されている。

「男爵…拝見するすべてのことにうつとりいたします…：おお、ユダヤ人がみな、あなたのようにしたら、どんなにか尊敬に値することでしょう！」

旅人…そしてキリスト教徒がみな、あなたの性質を持ち合わせておられれば、どんなにか好感がもてることでしょう！」<sup>37</sup>

## 第五節 『理性のキリスト教』

「人間は行為のために創造されたのであって、屁理屈をこねるために創造されたのではない」と主張したレッシングではあったが、しかし彼自身、いかなる意味でも「屁理屈をこねること」(Vernunfteln)、つまり形而上学的思弁から身を遠ざけたかという点、そうではなかった。『理性のキリスト教』(1751/52)と題された初期の断片は、若きレッシングの形而上学的思弁を最もよく物語っていると同時に、最晩年の『人類の教育』(特に§§3)を解釈する上で、きわめて重要な示唆を与えてくれるものである。<sup>38</sup>

全部で二十七の命題からなるこの断片は、全体としては、ピエール・パールのなキリスト教批判を対立軸に据え、ライプニッツ・ヴォルフの哲学に依拠しながら、「キリスト教の合理性」(Vernunftgemäßheit des Christentums)を証明し、かかる仕方で信仰と知識の乖離を理性の側から架橋しようとしたもの、と見なすことができるであろう。

最初の十二の命題において、レッシングはキリスト教教理の中核ともいふべき「神の三一性」について、その理性的証明を試みる。すなわち彼によれば、最も完全な存在者である神は、永遠の昔から最も完全なものを思惟することだけに関わってきた (§1)。それゆえ、神は永遠の昔から自己自身のみを思惟することができた (§2)。この神においては、「表象すること、意志すること、創造することはひとつである」。それゆえ、「神が表象するすべてのものを、神はまた創造する」のである (§3)。その際、「神はただ一つの仕方でのみ自らを思惟することができる」。すなわち、「神はあらゆる自らの完全性を一度に思惟し、そして自らをその完全性の総体として思惟するか、あるいは神は自らの完全性を分割して思惟し、ある完全性を他の完全性から分離し、そして各々の完全性を程度に応じて自ら自身から切り離して思惟するか」である (§4)。神が前者の仕方で自己自身を思惟し創造したのが、「彼自身が所有するいかなる完全性をも欠いていない存在者」 (§5) であり、これは聖書が「神の子」ないし「子なる神」と呼んでいるものにならぬ (§6)。この存在者は神自身と同一であり (§7)、「神の似姿」と呼ばれうる (§8)。神とこの存在者との間には調和がなければならぬ (§9)。聖書は両者間にあるこの調和を「父と子のもとからきた聖霊」と呼んでいる (§10)。父のうちにあるすべてのもの、したがってまた子のうちにあるすべてのものは、この調和のうちにある。それゆえ、この調和は神である (§11)。そして父と子と調和の「三者は一つ」である (§12)。

その次の九つの命題は、「自然学」ないし「世界論」に属するものである。すなわち、神はまた後者の仕方で、自己の完全性を分割しても思惟し、その各々が自己の完全性の一部を分有するような存在者を創造したが (§13)、それが「世界」である (§14)。神は最も完全なものを、最も完全な仕方では思惟し、かかる仕方では現実の世界を創造された (§15)。ところで、神の完全性を分割して思惟する最も完全な仕方は、無限に多様な完全性の度合いに応じて、しか



もその間に全く飛躍や亀裂がないように緊密に連続しているものとして思惟することである (§29)。したがって、この世界は完全性の度合いに対応した大いなる存在の連鎖をなしている (§11)。この連鎖は無限な連鎖であり、この意味において世界は無限である (§18)。神は単一の存在者だけを創造したのであり、複合的なものは神の創造の結果に他ならない (§19)。これらの単一な存在者のいずれも、他の存在者もっているものをもっており、他の存在者もたないであろうものもち得ないがゆえに、これらの単一な存在者の間には或る調和があるに違いない (§20)。自然科学はいつかは、自然におけるあらゆる現象を説明するであろうが、それにはまだ何世紀もかかるであろう (§21)。最後の六つの命題は、いわば「倫理学」に該当するものである。それによれば、世界のうちにある単一の存在者は、神の完全性に似た完全性を有するいわば「制限された神」(eingeschränkte Götter)である (§22)。自己の完全性を意識していることと、自己の完全性に従って行為できるということは、神の完全性の一部をなしている (§23)。それゆえ、完全性の度合いに応じて、この完全性を意識し、またそれに従って行為する能力にも相違がある (§24)。一定の完全性を有し、それを意識し、それに従って行為する能力をもっている存在者は、「道德的存在者」(moralische Wesen)と呼ばれる (§25)。かかる存在者が従うべき道德的法則は、その存在者自身の本質から取られており、それは「汝の個別的完全性に従って行為せよ」(handle deinen individualischen Vollkommenheiten gemäß) という定言的命法に他ならない (§26)。存在の連鎖には飛躍は存在しないので、自らの完全性をはつきりとは意識していない存在者もいるに違いない…… (§27)。

断片はここで中断してしまっているが、ここに展開されているレッシングの形而上学的思弁がルター派正統主義の立場からほど遠いものであることは、説明するまでもないであろう。哲學家の H・ハイムゼートは、この断片のな

かに「ニコラウスからライプニッツを通つてまっすぐレッシングにまで通ずる道」を認識しているが、この指摘を受けてW・ゲーリケは、クザーヌスからイタリア・ルネサンスの哲学者、ドイツ自然哲学、ライプニッツを経てレッシングへと至る精神的な流れを想定し、それを「スピリチュアリズムスの伝統」(die spiritualistische Tradition)と名づけている。<sup>40)</sup> それはともあれ、一方でこのような精神的系譜を想定し、他方でライプニッツ・ヴォルフ哲学からの直接的影響ということを考えると、レッシングの世界観を「一元論的人格主義」(ein monistischer Personalismus)<sup>41)</sup>と名づけたライゼガングの卓見さに共感せざるを得ない。というのは、一方においてレッシングがライプニッツ・ヴォルフ哲学の基本線に沿つて形而上学的思弁を展開しているのは明白であるが、他方において「表象すること、意志すること、創造することは神においてはひとつである」という命題は、彼の世界観をライプニッツ・ヴォルフ的な二元論からも、はたまたスピノザ的一元論からも区別するからである。<sup>42)</sup> この点については、最晩年の「スピノザ主義告白」の問題を考察する際にあらためて論じなければならぬが、いずれにせよ「理性のキリスト教」におけるレッシングの神は、スピノザの説くような非人格的な全一者ではなく、思惟するだけでなく意志する神であり、かかる思惟と意志の働きにおいて同時に創造する神である。ところで神において思惟と創造が一如であるということは、神が自ら思惟するものは同時にまた現実に存在するということであり、したがつて現実的事物は神のうちに存在するということになる。それゆえ、この断片におけるレッシングの世界観が、一切のものは神のうちに存在するとする「万有在神論」(Pantheismus)を示唆するものであることは、想像するに難くない。<sup>43)</sup>

この断片において注目すべきもう一つの点は、レッシングが存在者を神の完全性を分有する「制限された神」として捉え、しかも神の完全性の一部として、その完全性を意識していること、またその完全性に従つて行爲する能力を

加えていることである。ライゼガングが展開しているように、かかる洞察を人間学的に押し進めると、およそ人間には「完全性を所有しているがそれを自覚していない人」、「完全性を所有しそれを自覚しているが、それに従って行爲しない人」、「完全性を所有しそれを自覚し、かつそれに従って行爲する人」の三区分が生ずることになる。さらにここで「完全性」を「理性」という用語で置き換えると、「潜在的理性」(latente Vernunft)、「自覚的理性」(bewusste Vernunft)、「意志的・行動的理性」(wollende und handelnde Vernunft)と云う、理性の漸進的發展の三段階が得られることになり、最晩年の「人類の教育」*Die Erziehung des Menschengeschlechts* (1780) の深遠な思想を解く重要な鍵が与えられることになる。<sup>58</sup>

それともあれ、現実存在する悪とか罪の問題は、レッシングのこのような道徳的・理性的な世界観の中でどのように処理されるだろうか。神が自己の完全性を分割して思惟し、創造したのが世界であるとすれば、この現実の世界に存在する悪や罪は神の完全性とどのように関わっているのだろうか。若きレッシングが自らの形而上学的思弁を途中で断念せざるを得なかつた理由の一つは、おそらく彼がこのような神義論の問題を、自らの信奉する道徳的・理性的な世界観の枠組みによっては、捌ききれなかつたからであろう。

## 結びにかえて

以上われわれは、若きレッシングの宗教思想の主要な断面を考察してきたが、そこから明らかになることは、若き自由著作家としてのレッシングは、いまだ確固たる神学的立場に立っているとはいえず、あるときはルター派正統主

義に、あるときは敬虔主義に、またあるときは理神論に、さらにあるときはヴォルフ哲学的思弁に接近しながら、対立し合う種々の時代の思潮の間を揺れ動いていることである。それにもかかわらず、若き自由著作家の断片的著作は、すでに第一級の「神学の愛好者」(Liebhaber der Theologie)の片鱗を十分に示しており、それと同時に、成熟期の思想を先取りするような注目すべき萌芽を多く含んでいる。「全体を見渡せる高み」に彼が到達するには、まだ多くの挫折や紆余曲折が必要であり、われわれはそれを晩年の「賢者ナータン」と「人類の教育」まで待たなければならぬが、しかし修業時代の初期の断片的著作は、そこへと至る確実な第一歩を印していると言えるであらう。

文献略号

- B *Werke und Briefe in zwölf Bänden*. Hrsg. v. Wilfried Barner et al. Frankfurt a.M. 1985ff.  
 G *Werke*. Hrsg. v. Herbert G. Göpfert, 8 Bde., München 1970-1979.  
 LM *Sämtliche Schriften*. Hrsg. v. Karl Lachmann & Franz Muncker, 23 Bde., Berlin 1968.

註

(一) Richard Daunicht, *Lessing im Gespräch: Berichte und Urteile von Freunden und Zeitgenossen* (Wilhelm Fink Verlag, 1971),

S.7-8. (以下、Daunichtと略記)

- (二) Daunicht, S.8. 有名なこの逸話の真偽のほどはともかく、五・六歳の頃の彼を描いた現存の二枚の肖像画では、レッシングはそれぞれ本を手にして描かれている。  
 (三) Daunicht, S.14.  
 (四) Daunicht, S.18.  
 (五) レッシング同様、ライプチヒで学生生活を送ったゲーテは、『ファウスト』第一部の「ライプチヒ市のアウエルバッハ酒場」の場面において、「フロッシェに「ライプチヒはい所だ。小バリだけあって、住む人に磨きをかける。」(2171-2172)と語らせているが、レッシング遊学時代のライプチヒでもゲーテの時代とはは同様であったと思われる。  
 (六) Brief an Justina Salome Lessing vom 20. Januar 1949; B

11/1, 15-16.

- (7) 処女作『若い学者』*Der junge Gelehrte* (初演1748年)は、書齋的学問にうつろを抜かして自ら自分を嘲笑的に扱ったもので、「若いレッシンク」を知る上での間接的資料として役立つ。例えば、「美はねアン-ton 君、聖職者でどうものは一般に学問の世界に不案内なもの」とか、「わたしは年端もいかならぬ身ですべてにこれだけ多くを理解してゐるかを考えなさい、このこと(二人間が普遍的認識に至る能力をめぐつていふこと)が真実であること、まずまず確信を深める。ラテン語、ギリシマ語、フランス語、フランス語、イタリア語、英語——この六カ国語をわたしは完全に修得した。それなのにわたしはもうやく二十歳だよ」といった主人公ターニスの言葉は、「若いレッシンク」を彷彿とやらせらるゝか。G 1, S.282-284.
- (8) Brief an Justina Salome Lessing vom 28. April 1749; B 11/1, 24; vgl. 13.
- (9) Brief an Justina Salome Lessing vom 10. April 1749; B 11/1, 23.
- (10) Brief an Justina Salome Lessing vom 30. Mai 1749; B 11/1, 26.
- (11) レッシンクは、愛がキリスト教の本質であるとの信念を終生抱き続けたが、『ヨハネのテストアメント』*Das Testament Johannis* (1771) はこのことを最も直截に証言

若いレッシンクの宗教思想(安酸)

している。戯曲『賢者ナートン』*Nathan der Weise* (1779) に使われている同様のモチーフを讀み取ることが出来る。

- (12) G 1, 169.
- (13) G 1, 170.
- (14) G 1, 171.
- (15) Hans Leisegang, *Lessings Weltanschauung* (Leipzig: Felix Meiner, 1931), S.27-55. 本邦に引用所は本書のみ。
- (16) Johannes Schneider, *Lessings Stellung zur Theologie vor der Herausgabe der Wolfenbüteler Fragmente* (=s-Gravenhage: Uitgeverij Excelsior, 1953), S.57.
- (17) G 1, 171.
- (18) Bernd Bothe, *Glauben und Erkennen. Studie zur Religionsphilosophie Lessings* (Meisenheim am Glan: Verlag Anton Ham, 1972), S.15.
- (19) Leisegang, *Lessings Weltanschauung*, S.55. ナーヤガントンの宗教的業績に対する反響として、Schneider, *Lessings Stellung zur Theologie*, S.237-238, Anm. 13 参照。
- (20) Schneider, *Lessings Stellung zur Theologie*, S.57.
- (21) Schneider, *Lessings Stellung zur Theologie*, S.58.
- (22) H. G. ケンフヘルトは、『宗教』が断片にとどまらなかつた原因を、レッシンクが「自らに課した大きなテーマを思想的に掘ききれなかつた」とに見てゐるが、おそらく正しく思われる。Herbert G. Göpfert, "Erläuterungen

zu Band I", G 2, 614.

- (23) G 3, 683.  
 (24) G 3, 684.  
 (25) G 3, 685.  
 (26) G 3, 686.  
 (27) G 3, 686.  
 (28) G 3, 687.  
 (29) G 3, 688.  
 (30) *Berlinische privilegierte Zeitung*, 38. Stück, 30. März 1751; G 3, 54-55.  
 (31) レッシングはそれまで「若く学者】*Der junge Gelehrte* (1747)「ターキン」なしく真の友情】*Damon, oder die wahre Freundschaft* (1747)「女嫌く】*Misogyne* (1748)「老嬢】*Die alte Jungfer* (1749)とさう四作の喜劇を書いた。  
 (32) LM 5, 270.  
 (33) Christian Heinrich Schmidt, *Chronologie des deutschen Theaters*, 1775, S.141-142; zitiert von Dannicht, S.39.  
 (34) G 1, 380-381.  
 (35) G 1, 388-389.  
 (36) レッシングのこの理想は、例えば以下に引用するやうな賢者ナータンの言葉のなかによく示されている。「さうた民族とはなたていじやまじやう。キリスト教徒だのユダ

ヤ教徒だのと申しますが、わたくし達は人間である前に、もうキリスト教徒であつたりユダヤ教徒であつたりするのでしようか。ああ、——人間が人間でありさえすればそれで十分であるやうな人間の一人が、貴方さまであつて下さつたということは、この上もなく嬉しゅうございます。」(第二幕第五場)あるいは、「あんたから見ればユダヤ教徒と申せますからな、宗旨は違つても人情は一つなのです。」(第四幕第七場)

- (37) G 1, 414.  
 (38) レッシングの宗教哲学を論ずる上で、「理性のキリスト教」がいかに重要であるかは、以下に引用するG・シユピッカーの言葉がよく示している。「美のところ、レッシングの主要思想はこれらのわずかばかりの節のなかに含まれているし、そして彼は本質的にはそこで描いた基本線を決して越え出はしなかつた。」Gideon Spicker, *Lessing's Weltanschauung* (Leipzig: Verlag von Georg Wigand, 1883), S.7.  
 (39) Heinz Heimsoeth, *Die sechs großen Themen der abendländischen Metaphysik und der Ausgang des Mittelalters*, 8. Aufl. (Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1987), S.40.  
 (40) Wolfgang Gericke, "Lessings theologische gesamt-

auffassung," in *Sechs theologische Schriften Gotthold Ephraim Lessings*, eingeleitet und kommentiert von W. Gericke (Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1985), S.9-62; esp. S.14-15

- (41) Leisegang, *Lessings Weltanschauung*, S.63-64.  
(42) 『レッシングの神と世界』 Leisegang, *Lessings Weltanschauung*, S.59-65 及び Schneider, *Lessings Stellung zur Theologie*, S.112-113 が説得力ある議論を展開している。  
(43) レッシングが神と世界との関係をこのように考えていたかについては、ノルスマウ時代の「神の外なる事物の現実性について」*Über die Wirklichkeit der Dinge außer Gott* (1763) などの断片を参照する必要があるが、多くの研究者が「様々に描き出しているように、レッシングの彼の立場は『万有在神論』である。Vgl. Spicker, *Lessing's Weltanschauung*, S.167; Van Stockum, *Spinoza-Jacobi-Lessing* (Groningen: P. Noordhoff, 1916), S.64; Wilhelm Dilthey, *Das Erleben und die Dichtung* (16. Aufl., Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1985), S.116; Leisegang, *Lessings Weltanschauung*, S.63-65; Schneider, *Lessings Stellung zur Theologie*, S.146f.; Henry E. Allison, *Lessing and the Enlightenment* (Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1966), p.69.  
(44) Leisegang, *Lessings Weltanschauung*, S.104-107 参照。